

その他

渡部律子名誉教授オーラルヒストリー

—ソーシャルワーク研究と教育の道のり：
1990年代前半・アメリカのソーシャルワーク大学院教員—¹

2022年2月19日実施：第2-1回インタビュー
話し手：渡部律子先生，聞き手：岩永，大輪，阿川，太田，辻村

岩永理恵，渡部律子，大輪 礼，阿川千尋，太田聡子，辻村あずさ

Oral History of Professor Emeritus Ritsuko Watanabe Becoming Researcher and University Professor:
Early 1990s, American Social Work Graduate School Teacher

Rie IWANAGA, Ritsuko WATANABE, Aya OWA, Chihiro AGAWA, Tomiko OTA,
Azusa TSUJIMURA

要旨：渡部律子先生に研究と実践のあゆみを伺ったオーラルヒストリー報告，第3回目である。アメリカの大学院で教鞭をとった経験について話された。日本とは異なって大学院教員として採用されるまでの試験の難しさがあった。ニューヨーク州立大学バッファロー校に採用されたのち，英語で授業を行うことは苦勞の連続であったが，授業評価で高評価を得るなど報われる出来事もあった。当時のアメリカでは，すでに研究偏重の課題がみられ，「燃え尽きた」先輩もいた。教育への貢献が評価されない印象を受けた。この時期に頑張りすぎた影響で，リウマチ発症・手術，その後の長いリハビリを行うことになった。その後，シカゴ大学に客員教員として異動することになり，実習指導を担当した。その経験を通して，あらためて理論と実践の往復も重要さと難しさを実感した。

キーワード：オーラルヒストリー，ソーシャルワーク研究，理論と実践

Ⅲ. アメリカのソーシャルワーク大学院 教員時代（1990年から95年）

■アメリカの大学院教員採用試験

最初に教鞭をとった大学はニューヨーク州立大学バッファロー校（SUNY at Buffalo）です。ここからテニュアトラック教員採用試験の話をし

ます。なぜかというところ，日本とシステムが違って，「がまん比べ」みたいな採用試験だったからです。ひょっとしたら今は日本でもこんな厳しい試験をしているところもあるかもしれないし，アメリカでもみんながこんなことしないのかも知れません。バッファローではテニュアトラックとい

1 本稿は，本誌第62号掲載分から継続する内容である。

う、終身雇用を前提にしたポジションに応募したこともあり、採用試験がハードだったのかも知れません。テニユアは、大学がたくさんのお金を一人一人の教員にかけるので、厳しいということも言われました。一瞬たりとも気を抜けない二日間の採用試験だったんですね。

私は、正式な試験の前日にバッファローに行きました。ニューヨーク州は東西に長くて、バッファローは西の端でした。私は車で1時間半から2時間ぐらいの、ロチェスターというところに住んでいました。前日の夜に泊まって次の日、丸一日試験だからねって言われてたんです。グレイハウンドというバスに乗ってバッファローに行ったら、駅に何と学部長が直々にお迎えに来てくれていました。実はもうそこから試験は始まっていたようです。インフォーマルだけれども、学部長自身が人物評価のために私とやり取りするわけです。車の中で雑談をしていて、私が「うちの夫は」と言ったら、学部長が「夫のことは別に話さなくてもいいんだよ」って言われてたんです。採用の時には、性別、年齢、宗教、性的指向、婚姻状況等、問わないのが決まりになっています。そのため、話したければいいけれどそうでなければ、夫に関して話す必要はない、ということを確認にされました。「すごいな、さすがアメリカ」と思いました。

前日の夜は、「同じような授業を担当する若手教員が律子と一緒にご飯食べたい」と言っているということで、会食でした。もうそんな喉に通るようなご飯ではありませんでした。ある種インフォーマルの面接ですね。でもその中にミシガン大学出身者が二人いて「聞きたいことがあれば何でも教えるよ」と言ってくれて、すごく親切だなと思いました。

二日目は朝からブレックファーストミーティングなんですけどね、8時ごろ、ドーナツを食べて本当にアメリカのドラマみたいにコーヒーを飲みながらまた他の教員に「インフォーマルだよ」っ

て言われながらフォーマルな話をする。そして、私と同じ高齢を担当する先生がいろんな関連施設（つまり実習先です）を見せてくれました。大学が私を選ぶと同じように私も大学を選ぶというスタンスなんですね。「あなたが今後、共同研究したいかもしれない施設になるだろう、だから一緒に見に行こう」って言って見に行きます。そしてそれが終わって、くたくたになって帰ってきた午後3時からが肝心の博士論文の発表会です。まあこれは我慢比べかと思うぐらい、つまりもう心も頭も、特に英語なんかも底をついているという時に、「さあ、ここから博士論文の話をしてください」って言われて発表します。そしていくつか質疑応答があって博論の話が終わると、昨日までとっても優しかった学部長に「律子、来なさい」と個別に呼ばれ「あなたはとっても優秀で重要な候補者の一人だけれど、これからみんな話して結果を出します。まあ、しばらく待っていてください」と告げられました。しかし、私は駄目だったよなあと思いました。なぜかという、私の同期の友達がバッファローの採用試験を受けていて、バッファローから採用のオファーがあったと電話をくれていたのです。バッファローの採用枠は一人だったんです。「あー、じゃあもうダメだ」って思いました。

しかし、アメリカって例外が起こる国なんです。採用枠は一つだったんですけど、学部長から電話がかかってきて「律子、枠は一つだったけど、みんなが全員一致で君を取りたいって言ったから採用だ」ってね。私、舞い上がっちゃって、「まあこんな凄いことが起こるんだ、この国は」と思って、「ありがとうございます」っていう感じで電話を切ろうとしました。すると、学部長が電話の向こうで笑って「これ以上何も聞かないの」と言われたので、「なに聞くんですか」って言ったら「給料は？とか〇〇が欲しいとか交渉するのがアメリカだ」と教えてくれました。そうやって

お仕事が貰えてすごく嬉しかったんですが、通勤は車で片道2時間かかる場所でした。

■大変な授業準備

毎日通えないので、週一回だけ通うことにして、新任教員のエリザベス・ロビンソン（通称リビー）とアパート暮らしをします。彼女はミシガンに夫がいたんですが、彼女の夫は仕事を変えられないので、私とリビーで下宿生活を始めました。二人で「律子、授業の準備できた?」「ううん、出来てない」とか言って授業準備の話をしたり、なかなか楽しかったです。毎週月曜日にリビーともう一人の新任の先生とで食事をしました。新人は入門クラスを教えさせられるんですね。日本で言えば多分、援助技術論Iみたいなもので、それはテキストも決まっているし、おおよそのプログラムもすでに決まってるんですが、中に何を盛り込むかには自由度があって、その話をするために毎週月曜日授業が終わったら三人で反省会と銘打ってイタリアンレストランに行って、山ほど食べてその年はむくむく太りましたが、この夕食反省会に本当に助けられました。だから持つべきものは同僚だと思いました。でも、二人と違い私は新人な上、外国語である英語で教えるので「Good morning everyone」から始めて「Have a nice weekend」で閉める、30ページの完全原稿を作っていました。それにものすごく時間がかかっていました。

さっきテニユアトラックの説明をしましたが、アメリカでは研究が中心です。だからテニユアを取るためにも、一番比重が高いのは研究です。当時、私より6年先輩がテニユア審査に当たる7年目の最終年に4本の査読論文を書いたんです。彼と会ったら、「今、どの論文に何を書いているかもわからないです」と言うんです。つまり自分が持っているネタで4本に書き分けをしているから、自分がどれを書いているかわからないぐらい

大変だと言っていました。彼は上手く associate professor になりましたが、でも、それから3・4年後に「燃え尽きた」って辞めたそうです。だから、「こんなのでいいのかな」とも思いました。

■大学院の環境

授業準備はさっき言ったように大変でした。私は英語の発音が悪いんです。特に自分の名前の律子の「r」それから渡部の「w」を上手く発音できません。しかし、学生の中に私の下手な英語の発音がわかるようになっている人がいて、皆が「ん?」って顔をしていると、その人が「今、律子はこう言ったよ」と他の学生等に翻訳してくれました。何て優しい人だろうと思いました。

私は、新人の外国人だし、最初のクラスは本当に人気なかったんです。学生さんは、自分でどのクラスに入りたいかを決めるんですけどね、私はもう残り物のクラスで、人数も最低限で定員割れでした。でもそのおかげでじっくりと授業ができました。ロールプレイなんかいっぱいできて、ロールプレイのフィードバックもやりました。学生が伸びるんだっていうのもこの時に感じる事ができました。だから最初良くないことも後々いいことになるのかな、と思いました。

あと、学部の文化っていうのがすごく面白かったです。フレッド・サイデルという学部長が1960年代学生運動の名残^{なごり}を持ち、「熱いソーシャルワーク魂」に燃えている人だったんです。今、私は「ソーシャルワーク界の松岡修造」と命名させていただいています。廊下ですれ違おうと、「律子、（私だけじゃないです、みんなに言うんですよ）今、君の中で燃えている、ハートの中で燃えているのは、何だ」と言ってね。「何も燃えてないです」「燃え尽きそうです」と言いたいんですが、「何に魂を燃やしているか」と聞いて聞かすよ。でもね、そういう結構熱いのも、なかなかいいなあと思ってね、ソーシャルワークってこん

なもんだったんだって。私は、半年の授業が終わった時にも本当に自信が持ててなかったんですね。英語もできないし、高齢者専攻は人気が無いし。実習も嫌々行くんですよ。その人たちからの不満の電話がかかってくる。「なんで私は高齢実習に行かなきゃいけないの」ってね。30分から1時間ぐらい話をして、「とにかく、とにかく行ってみようよ」「何でも聞くから」ってやるわけです。そんな中で授業もどんな風に受け取られたかわからなくて、授業評価が終わってすぐ学部長のところはどうだったかを聞きに行ったんですよ。「もう結果出ていますか」ってね。そうしたら「まだ出てない。出たら教えてやるよ」みたいに言われて。それからしばらくして、ある日廊下で学部長に呼び止められて、「律子、一体君は何をしたんだ」って言われたから、「私、また何か失敗したわ」と思って「えっ何しました？」って聞いたら、授業評価で、「常勤中トップだった」と言ってもらったんです。英語はできない、一番人気のないクラスの担当など、ネガティブ要因満載だったのんです。その時にまた「アメリカって何て面白い国なんだ」と思いました。

■研究対教育

研究偏重の課題ですね。私とルームメイトのリビーで「こんなのよくないよね」って話していました。そこで「教育にも力を入れたいよね」と話し合い、二人で頑張って教育助成金を取ったんです。それは、教材開発に使っていいお金だったんです。その助成金の授与式で、ディレクターが最初に受賞者全員に「おめでとう」って言ってくれました。そして、続けて「あなたたちはkiss of deathをしました」と付け加えました。この表現は「死の口づけ」と訳すんですけど、「教育で認められるということは、もう研究者として認められないということ。だから、この賞をもらったなら、テニユアは取れないかもね」と冗談のように言わ

れました。ご自分がファカルティー・ディベロップメントのディレクターであるのに、大学の中で教育がおとめられているということに対する彼女のつらさの表現だったのかも知れないな、と後になって思いました。研究だけを偏重していたら教育はどうなっていくんだろうという思いを40数年前に持ちました。

ここからは大学院の学生さんたちの話をします。半分以上、私と同じぐらいの年齢か、年上でした。でも、いろんな年齢の人がいたので非常に面白く、彼女や彼らの人生経験が私の幅を広げてくれました。もう一つ分かったのは、学生のGPA、つまり成績が必ずしもその人がソーシャルワークに対して持つ熱意や可能性を示すわけでもないということです。高齢者のクラスは、専攻の人が八人ぐらいいました。ゼミみたいな感じですよ。そこに、落第ギリギリと位置づけられている学生がいました。しかし、その内の二人が何と二年後、私と一緒に学会でのポスター発表に至りました。研究法を教えると「楽しい、楽しい」って吸収するんですね。修士論文に相当するリサーチペーパーで「何をテーマに書く？」と聞くと、「なんか面白いことしたい」って言ったんです。あなた達がやる気なら私もちょっとは手伝うと伝え、一人は私と一緒に話し合いをしながら調査をしました。もう一人は、実習先が研究志向の高い、とてもいいところで、その指導者が持っていたデータを使わせてあげるよって言ってくれました。彼女もそれを発表して「生まれて初めて自信を持った」と言っていました。

■リウマチ発症・手術

この時にちょっと頑張り過ぎたので、最初の一年間すごく肩が痛かったんですけど、病院に行く暇もなかったんです。行こうと思えば行けたんですが、「そんなことをしてられないわ」と思って放っておきました。そのあと、休みに入って初

めて病院に行ったら、先生がレントゲンの結果を見てびっくりして、「肩関節が全くない」と言われました。それまでも痛かったけど、レントゲンを見せられた途端もっと痛くなりました。それでも人工関節しか痛みをとる方法がないって、「痛の末期の痛みと一緒です」と言われました。でもモルヒネに近い鎮痛剤を飲んでもダメだったので手術することに決めました。術後のリハビリテーションは大変でしたが、家でもずっと続けました。

■ (1993年～1995年) 夫にオファーが来た シカゴ大学に客員助教授で移動

長いリハビリ生活を経て、何とか痛みも緩和され日常生活に戻るようになりましたが、その頃から、厳しいアメリカでこれ以上大学院の教員として生活することは私には難しいと考え始めました。アメリカ人の3倍以上、あるいは5倍ぐらいの時間を割いて仕事をしていたと思います。こんなに苦勞して頑張ってテニュアが取れても、アメリカ人の先輩が辞めたぐらいだから、それまでに私の教員人生も終わっているかも知れないと考え始めました。当時、母親の体調も悪かったし、「日本に帰りたいなあ、帰れば使う言語は少なくとも日本語だ」と考えていた時に、たまたま面白いことが起きます。うちの夫が、私の健康を気遣い一生懸命次の道を探してくれたんです。夫は、当時まだ企業で働いていたのですが、私と同じくミシガン大学で博士号を取っていました。その博士論文を盛り込んだ本を書いて出版すると、シカゴ大学のビジネススクールの学部長が、その本を読んで電話をかけてきたんです。私たちもびっくりしたのですが、夫に「君があの本を書いた著者か」と尋ね、まだ企業でしか働いたことがなかった夫に「シカゴ大学のビジネススクールに来ないか」と仕事の依頼が来たのです。ちょうど、当時日本の仕事を探し出して、ある所に行けそうだったの

ですが、それまでには少し時間がありました。そこで夫が、「妻は、教員をしている。それをやめさせるのは忍びない」と言ったら、学部長は「自分は他学部の採用はできないけれど、ソーシャルワークで教職の口があるかどうかぐらいは聞いてやる」と言ってくれて、シカゴ大学で一応面接をしてもらえることになりました。シカゴ大学の採用はすごい厳しく、もちろんテニュアトラックなんかでの採用はなしで、「まずは客員から行きましょう」ということで、客員で採っていただきました。

学校のランクが高いところは、学生さんも「学部の成績は、Aばかりでした」という人たちがやってきます。でも大学院に入るとBもつきます。Aばかりつけちゃいけないのでね。学生さんたちにBプラスをつけると、研究室に質問にやってくるんです。「律子、どうして私のレポートはBプラスなの？私は、A以外取った事がない」「そうだよ、あなたは本当に優秀だったと思う、それはよく分かる。でもね、ここには優秀な人がいっぱい集まっているんだよね」と言って、私はAプラスのレポートを書いた学生に了解を得て、名前を出さずにお見せしていました。比較するしかない。私がいくら言ってもだめだし、私は日本人だし、日本人だから英語のレポートの意味が分からなかったんだ、って言われる可能性がありました。教員としてアメリカで学んだことは、教員が評価する時に、ちゃんと自分で尺度を明確に持つておかないといけないな、ということでした。今、日本も同じようになってきているので先生たちも非常に気をつけていらっしゃると思いますが、難しかったです。全て説明をする、それからシラバスに全て書く、何をするか、宿題は何か、どんな基準で成績をつけるか、でした。

実習指導では、まさにアメリカの都市が抱えている問題を見せつけられました。貧困、犯罪、依存症、今では日本でも児童虐待が問題になってま

すけども、当時から驚くほどの数で、問題視されていました。学生たちが実習に出て行く場所も、本当によく頑張ってくれるなって頭が下がるような場所だったんですね。実習開始前に学生たちを集めたオリエンテーションでは、バッファローでは言わなかった注意事項があるんです。何かというと、「実習先から帰ってくる時、少しでも身の危険を感じたらタクシーに飛び乗りなさい、お金を持っていなくてもOK、大学に戻って来なさい、大学がお金を払います。」その時に、どれほど危険な場所を実習に行くのかが分かりました。

バッファローの学生さんたちも、すごく真剣に一生懸命勉強する学生さんたちだったんですが、シカゴ大とは違いがありました。バッファローは州立大学ですが、シカゴ大は私立大学です。授業料も高く、学生たちは「授業料に見合ったことをしていただきますよ」という感じで授業に臨んでるんですね。実践経験もある人たちです。だから丁々発止としたやりとりが行われました。

■理論と実践

授業でやったことが実践に通用しなかったら「あれは何なの」と質問にやってきました。でもそれは教員としてとても勉強になりました。実践に使える理論を教えるクラスを担当していたんですが、毎週「その理論がどう実習先で役に立ったのか、立たなかったのか」をレポートにしてもらう宿題を出していました。最初の20分くらいを使ってそのディスカッションをして、ほかのテーマに入るんですが、もうそのディスカッションで90分が終わりそうになることもありました。学生たちが実践と理論の行き来をするんです。その時、ある学生がこういうことを言いました。修士一年目の学生です。「律子、システム理論とか難しい理論は格好いい。そこで起きていることを説明するのも素晴らしい。でもあくまでも説明に役立つということだ。それを使って私が実習先で何が

できるかって言われると何もできない。」そして、「いつかは役に立つだろうけど、今一番役に立っているのは何かと言えば『基本のき』であるクライアントとどうやって関係性を作ることができるのか、というロジャーズの理論だ。」「ヒューマニスティック心理学って言われるロジャーズの、人が人と対峙する時には真剣に関わらなければならないということ、本当に役に立った。」ということ、シカゴの学生に言われました。シカゴ大学でもバッファローと同じように、同じクラスを複数の教員が教えるんですね。自分でいくつかリーディングを選択するんですが、自分でコピーしなくてはいけなかったので、ロジャーズの論文をコピーしていたら、同僚ですごく実践もできるし理論的にも優れた男性教員が通りかかって、「律子、何コピーしてるの」と聞くので「ロジャーズ」と答えたら、鼻で笑われた気がしたんです。そこで、この話を学生から聞いた後、その教員のところに飛んで行ったんですよ。「この間笑ったでしょう」とね。すると、「いや、ふんって言ったのはね、現実、そうだろうなと思ったからだよ。僕たち難しいことを教えてるけど、こういうことが追いついてくるには時間がかかるんだ。でも基本は軽視されがちだよ。」という話になりました。私が勝手に鼻で笑われたと思ったのです。

この頃私はセルフヘルプにも関心を持ち出します。特にうつ病に関心があって、NIMH、アメリカの国立精神保健研究所のうつ病研究の主任研究員をしていた先生が、シカゴ大の教員になって来てらしたんですね。その先生が担当している授業にも出させて頂きました。研究ってここまでやるんだと思ってすごく勉強になりました。

私は、精神保健にも興味があったので、シカゴにいた時には機会もいっぱい頂き、他の人たちがやっている研究会などにも出させてもらいました。有名な教授たちがたくさんいる大学のメリットは、その人たちの知識の深さと横の繋がりのおかげ

さに触れたことです。私は客員だったので、割と自由にみんなの間を行き来できたんです。日本人で年齢より若くみられ、学生の名残りもあったようで、先生方の授業も聴講させてもらいました。そこで、「先生、私もっとこういうことやりたいんです」と言ったら、「私の知り合いがやっている研究会があるから行ってみる？」という話になり、そこに行かせてもらえることもよくありました。その一環として統合失調を持ちながら臨床心理で博士号を取り、色々なところで講演をしている先生の講演に行きました。その先生は、自分が当事者ではあるけれども客体視しつつ、かつ当事者としての目を持って講演してくれました。講義の途中で「実は、今、私はとても疲れています。人の前で話すために、とてもエネルギーを使っています。」と正直におっしゃるんですね。続けて「しかしこうやって話し続けることも出来る」とも言われました。そして、その先生は講演で自分がこれだけのことをしたら残りの一週間は寝込むって言うことまで話してくださり、自分は単に障がいを克服した英雄なのではないという現実を話してくれました。様々な人たちに会い、学べたことは幸運でした。

◆質疑応答

対話者 E: 渡部先生ありがとうございます。すごい生き生きと当時のことが伝わってきて。すごいよく覚えてるのがすごい、それもすごいなと思った次第なんですけど、先生が繰り返しおっしゃってたみたいに、かなり厳しい社会なんだなあっていうふうに思いまして、あの実際どういう人がこのような社会って生き残っていくことが出来る、誰が最後に生き残るんだろうかっていうふうに思いまして、そこをどういう特性を持った人だったように先生としては見えたっていうのをお聞きしたいのが一点目。あと二点目としては、先生がアメリカで教鞭を取っている年代の背景とし

て、その頃こう中心的な理論であったり、生まれつつあったその理論であったりってところの、動きって言うか生なところを教えてくださいというのが二点目です。この二個です。

対話者 B: 一つよろしいですか。渡部先生ありがとうございます。あの後半でお話頂いた、その障がい、統合失調でしたっけね、お持ちの当事者の方が力を発揮することが、広く他の方たちにも般化されてしまうみたいなところに疑問をお持ちだったっていうようなお話があったと思うんですが、その疑問をもう少し教えていただけたらと思います。

対話者 A: 渡部先生これちょっと踏み込んだ話かもしれないので記録に残せなかったら省いていただきたいんですが、ちょっと最近自分が関心があったお聞きするんですけど、先生のパートナーが職を得たあたりのところの話と関係してるんですけど、あとちょっとソーシャルワークにも関係するかもしれないって何うんですが、夫婦のパートナーの関係ってというのがヨーロッパ、アメリカと日本っていうのはかなり違うんじゃないかっていうのを、自分の狭い交友関係から推測しています。というのも、私の最近の理解なんですが、何て言うのかな、ヨーロッパとかアメリカの人たちのパートナーって、なぜパートナーになるかって一位にラブがある気がするんですよ、一位に愛があるっていうか。先生のパートナー、先生夫妻のパートナーシップのように「片方が日本に移るんだったら、自分も日本に行く」っていう、あるいは先生がアメリカにいて一緒にアメリカで移動して、やっぱり一緒にいて日々のことを共有してその親密な関係を築き続けるってこと、あと愛情があるって事にパートナーの意味を見出すっていうのかな、もちろん日本にもそういうのはあるし、そうであるべき部分もあると思うんですけど、日本ってもうちょっとクールな気がするんですよ。シビアっていうかクールっていうか、生活のために結婚す

るみたいなどころも、もちろんアメリカでもあると思いますよ、それもどっちもあるものもあると思うんですけど、傾向としてなんかそういう感じがして、日本のパートナー関係ではありえないことを、そのパートナーの生まれた場所とか育った場所の違いによって生まれている気がして、なんかそういうのって、家族の関係性とかパートナーの関係性とかっていうことへの理解に、家族ってどういうものかって考える考え方がそもそもまたイギリス、ヨーロッパとアメリカと日本で違うんじゃないかなって思ったりして、なんかそういうことが、ひいては後半の話になってくるかもしれないんですけど、そのアメリカで生まれたとかヨーロッパで生まれたソーシャルワークの理論みたいなものを日本の現場に応用する時の難しさみたいなことを考えるのにヒントになるのかなと。逆にまあちょっと下世話な意味で面白いなと思ったりするんですけど、両方の意味で改めて先生の来歴をお伺いしながら関心を持ったので、差し支えない範囲でお答えいただければ嬉しいです。ちょっと私の質問が長くなりました。

対話者 D: もう一個、じゃあ私も追加でいいですか。一個だけ。私は、慢性疾患の発症と大きな手術の経験っていうことで、リウマチっていう慢性疾患だと、治るといふなかなか長く付き合っという疾患に患ったということ、今までこうやって頑張ってたんですけど、リウマチっていう疾患となったときに、仕事、病気の治療とかの両立とか、今まで思っていた描いていた人生設計にこういう疾患ってどういうふうに影響して、またどういうふうに向いていこうかな、なんていうところがあったのかなってことを、ちょっとお聞きしたかったということ、私もなんか就職した頃って、今はすごくいい治療が出て、そんなにあのスワンネックとかいって変形する方って少なくなってるけど、その当時って結構リウマチだと関節の変形とか色々あったのかな、なんて思

うんですけど、そういうご不安とかなかったのかなってことをちょっとお聞きしたかったです。以上です。

渡部先生: はい、皆さんありがとうございます。記憶をたどると最後の質問の方が私の記憶がはっきりしているので、そこから答えます。まず対話者 D さんが言うてくださったリウマチに関してはその通りです。私が罹患した時には治療法はなかった。せいぜいステロイドでなんとかその場しのぎ、ただしステロイドをずっと継続することの問題性もいっぱい指摘されていて、日本から家族が本を送ってくれたんですが、治らない病気だということがズバツと書いてありました。私自身もちろんすごく不安で、「なんで?」と思いました。どうして私がつて、でもつらつら考えると本当に無理をしてきたんですね。自分で無理をしてきたから、なつてもしょうがないなつて。ただ、私の発症は大関節からなんです。肩関節です。普通は小関節から発症して徐々になつてですね。ところが私は大関節をバーンつてやつたので、すごく大変だつたけれども、これを何とかせねば、日々どうしていこうかということにまだ頭が回つていなかったと思います。その時はもう爆弾を抱えているみたいな感じ。だからそこだけに自分の気持ちが集中して、これを何とかして欲しいと思つていました。そののち日本に帰つてきてから、リウマチと向き合つていかなければならなつた時の方がしんどかつたです。歩けない、いつ歩けなくなる日があるかも分らない。日によって、時間によって、歩けたり歩けなかつたり、それから指も使えなかつたり使えたり。波があつて予測不可能。肩関節はいっぺんに来ちゃつたから手術でそこだけはこうなるつていうのが予測がついた。でも、これが予測がつかない慢性疾患であれば状況は違つてきます。実は、日本に帰つて来つた方の方が、仕事を辞めようと思つた時が何度もあつたし、つぶれかけたことも何度もありまし

た。不安はより高かったです。ただ、助かったのは、私、ストレスコーピングを勉強したのがすごい役に立ったんです。今はこういう対処をしてるんだなとかね。時として自分を客観視できました。

次、対話者 A さんの質問に答えます。これ、丁度昨日この話をしてたんです。家族アセスメントを今度研修でやってくれてと言われてね。一応アセスメントのスタンダードとして出ているのは、やっぱり西洋で生まれたシステム理論から出たアセスメントなんです。だから対話者 A さんの最後の質問の詳細のところから入って行くんですが、理論の応用は気をつけないといけない。その元になっているデータが違う。ただし一部は使えるし、そこに臨床から導いた学びを足し算して使うことによって役に立つと思います。何かというと、家族というのは日本の場合、アメリカの家族システムの理論家が言うエンメッシュメントに近いタイプが少なくありません。纏綿家族って多分日本で訳されると思うんですけどね。でも日本ではある程度、人の気持ちを読むということが大事にされてきたし、家族のなかではそれを大切に生きてきた。西洋の理論を日本の家族の問題対応にどのように役立てていけるかを考える必要があります。いろんな生き方が世の中にはありますが、その人たちが困っている時には、一緒にどうするかを考えればいいんですけどね。「考える」ための枠組みをくれるのは、西洋で生まれた理論かもしれませんが、それをどう使うかは非常に慎重にしなければいけない。私、ヨーロッパはわかりませんが、アメリカに関しては「個と個の結びつき」が基本です。個というものをやっぱり大事にする、これ以上、踏み込んではいけないというところをいつのまにか成長過程で学んでいくというのが、中流の、私がいた時代のアメリカの家族です。今は変わっているかもしれません。これ、後で対話者 E さんの話にも関係する時代背景でもあるんですけどね。

1980 年代の私が行った時代のアメリカは経済的には低迷していました。しかし、その中でも一応中産階級で教育を受けている人たちは、個を大事にしなければいけないと思っていました。夫婦がすぐ別れる、と日本の人たちはアメリカの夫婦を非難していました。それはなぜかというと、やっぱり夫婦が持つべき、シェアするべき価値観みたいなのがあったからだと思います。日本の家族というのはね、機能の役割分担。さっき対話者 A さんがおっしゃった、夫婦というのがもう少しクールってというのはね、夫は稼いでくる人、妻は家で何何ってね。これ役割分担なんです、機能の。日本の家族では長い時間をかけてこの役割分担ができてきていたんだと思います。アメリカでは、そういう意味での性別役割分担を外そうという方向に動いていました。性別役割に関する考え方は、アメリカではなるべく排斥していこう、特に夫婦の結びつきの間では、というのを中流の人たちがやっていた。アメリカの大学の先生でも別々に暮らして、そして休みの間だけ一緒に生活するという方たちもいました。ただし私がシカゴに移る時にうちの夫が言ったことは、私のキャリアをつぶさない、シカゴ大のビジネススクールの学部長が言ってくれたこともそれを充分理解しているってことなんです。ですからその大前提は共有されているところがありました。これは企業も同じです。対話者 A さんの言われた理論応用っていうのもエリクソンなんかを見ていただいたらわかるように、エリクソンの発達段階も、結婚する、子供を産むっていうことが大前提で作られているんです。今、あれが通用しないところがいっぱいあります。ただし、今でも納得できる心理的・社会的な成長もあるので、その理論をどう使うかということをしつかり議論して、ここの部分は無理でしょ、というかね、ここの部分はこう応用できるでしょう、とすることを考えて使う必要があるというのが、日本の社会福祉教育に関して私が

ずっと持ってきた思いです。

日本って明治維新の時も第二次世界大戦後にも言われたんですが、「ずっと価値観を変える」ことができたようです。「新たなものを取り入れることができたすごい国だ」ってね、文化人類学の人達がびっくりしているんです。しかし、私がそこで気付いたことは何かというと、取り入れたふりをして本当はその西洋の文化が何を意図していたかを議論することなくやむやみして、「なんちゃって西洋文化」を作ったのかもしれないということです。これからかなり厳しい物言いになるかもわかりませんが、「なんちゃってソーシャルワーク」も少なからずあるという気がします。それはきっちりと吟味し検証し、応用していかねばならないと思います。しかし、それがそのまま「ソーシャルワークと言い換えましょう」、「理論もそのままみんな取り入れましょう」として、分析をする時間と姿勢を持たないままそうしてしまったから、「西洋の理論は良い、対ダメだ」という二択の考え方になってしまって、全否定か全肯定になっていると思います。ですから、最近よく聞く「日本は日本独自のものを作らなければ」ということにもつながってるんですね。日本の家族はどういう特性を持ち、どう動いてしまったらその家族が不幸になって行くのか、なぜなのか、そして西洋で発達した理論のどれをそこに应用することができるのか、そのとき実践家はなに気をつけなければいけないのか、ここまできっちりと考えて話を進める必要があります。でも、大きな部分で動いている人はそこまで考えられないのかもしれないと思います。常に歯痒さを感じます。なぜかという、時々、「西洋の理論ダメ」と全面否定されるからです。アメリカにいた時に私自身、たくさん疑問を持ち、授業で何度も先生たちに質問に行きました。「先生の今の考え方を使うと、日本の家族って多くが病理的に見えるんですけど」と問い、それをテーマにレポートも書きま

した。そんな中でやっぱり変えていかなければならないところもあるっていうのは思いました。「理論と実践の往来」って簡単に言うんですけど、本当にそれをするためにはすごい時間かかるし、研究者としてしっかりその目を持っていなければいけない。自分が実践やってなくてもいいんです。わからなければ、実践家に聞けばいい。実践家は研究者に聞けばいいと思っています。幸せなことにアメリカでそういう実践、研究の仕方をしている研究者に出会うことができたんですね。

次に対話者Bさんが質問してくださった、統合失調の力を持つ人が力を発揮する、私は力を発揮してはいけないと言ってないんですね。統合失調の人あるいは身体障がいを持つ人、障がいを持つ人たちの中で「スーパースター」と言われている人たちがいます。その人たちがすごく努力をしてそこに到達されたこと、それはきっちりと理解したいです。ただ今の話と一緒になんです、気をつけたいのは成功の部分だけ、つまり大きなところだけに焦点を当てて、それをそのままみんなに当てはめる、つまり一般化して「誰でも頑張ればそうなれるはず」って言うことの危険性を私は危惧しています。ですから、一般化しない。24時間テレビやりますよね、本当は細かい部分も見せているはずだから、それを思えば一般化しないはずなんですけども、私達は認知的に怠け者と言われていています。どういうことかという、複雑さを避け、簡単に考えたいんです。その方が楽ですから。だからすぐ一般化しようと思います。障がいがあるけれど、誰だって努力すればあの人みたいになれる、これね、あの認知心理学やっている人はお分かりになると思うんですけどね、一般化しちゃうんです。そうしてはいけない。だからスーパースターになった人たちが一生懸命ちゃんと言ってくださっているはずなんですけれども、マスコミがその部分を聞かないで報道したりする。私が例に出した講演で話された先生は、逆のことを一生

懸命言おうとしていた人なんです。自分がここまでくるのに家族がどれだけの犠牲を払っているかも話してくれました。それから自分自身もここでこれだけの時間喋ったら、残りの一週間はずっと寝ているんだって。だからそれを忘れて欲しくない。なぜかという、聞きに来た人たちは、精神保健福祉に関わる専門家だったんです。ですからとっても大事だと思うのは、当事者の人が専門家に話をすることです。その大切さを学びました。しかしその時に同時に大事だと思ったのは、(時に起きるんですけど)当事者の人が、「あなたたちは何もわかってないから、私たちの話を聞いて、専門家なんか知らない」というスタンスは違うということでした。講演してくれた先生は、「専門家のあなた達には理解しておいて欲しい、統合失調をもっているでもこうやって立派に人前で理路整然と話をすることができる。しかしその背後で私たちは大きなエネルギーを、あなたたちとは違うエネルギーを使っているのだ。お互いに助け合おう」というメッセージを送ってくれました。

これ対話者 A さんの言われたことと一緒なんです。日本がいけない、アメリカがいけないヨーロッパがいけないじゃなくて、どっちからも学べることはあるはずなんです。ただしね、これ細かい議論を避けては通れないんです。だから今も当事者がよくやることでもあるんです。専門家否定、それは専門家も学びが足りないから、でも当事者の方たちも専門家の可能性を忘れ去ってしまっているんです。お互いがちゃんと真剣に向き合おうよってことなんです。そこで絶対に分かり合えない事もあります。「ごめんこれわかんない」と分かったふりをしないことは必要だと感じます。分かったふりをしようとしてそのまま右から左に単に翻訳するだけとか、「これ正しいことらしいですよ」って言わない。「らしいですよ」っていうのは絶対ボロです。だから、

対話者 E さんの「厳しい社会、誰が生き残るの

か」という質問ですよ。人によったら生き残れない。これ、時代背景もあります。アメリカに私が行った時、1980年代、アメリカは貧しかったです。ちょうど自動車産業が低迷していて、日本人に対する目も厳しく、今の日本と今のアメリカ、逆だと思います。ただし、まだアメリカがアメリカの理想、アメリカンドリームを捨てていなかった時代です。今のアメリカとはずい分違っているかもしれません。1950年代から60年代の公民権運動等を経て、アメリカ人が理想を追求しようとしていた時代だと感じました。その中でソーシャルワーク学部が何を目指していたかということ、やっぱり人権尊重、民主的に行こうねということ、やっぱり人権尊重、民主的に行こうねということ、誰が生き残るかって言った時ね、一応アメリカの理想としては「努力をすれば敗者復活戦はあるよ」っていうやつなんです。日本でよく自己責任、自己責任って言いますよね。アメリカは自己責任の徹底した国ではあるんですけど、いいところをすごく褒めてくれ、敗者復活もある自己責任でした。それから困った時には一応助けてくれる、セーフティネットも作ろうよ、としていた上での自己責任ではあるんです。医療保険を除いては、医療の領域はちょっと間違ってますが、対話者 E さんの質問に戻ります。私は、日本にいたら大学の教員になれていなかったと思います。アメリカの先生たちは褒め上手でした。できることを褒めてくれたんです。ちょっとのことでも「よくできるわ」って褒めてくれてね、「豚もおだてりゃ木に登る」で、私は木に登った豚なんです。アメリカに行った当初、「日本は失敗探しの国だったかも？」と思いました。できてないところを見つけていく減点主義、アメリカは加点主義。もちろん確かに厳しい社会なんです。その代わり、加点主義の最後はみんな競争するよっていうのはあるんです。でも競争をして、ダメでもまた頑張ればその人が這い上がれるかもしれない。